

2024/4/24

PIANC Marcom WG 225 「港湾施設の耐震設計ガイドライン」 全体会合@東京

港空研 野津

PIANC Marcom WG 225 「港湾施設の耐震設計ガイドライン」の全体会合が2024年4月2日～3日にOCDI東京事務所で開催された。対面での全体会合は2023年9月4日～5日にブリュッセルで開催されて以来で2回目である。参加者は以下の10名であった。

Mr. Carlo Lai (Italy), Mr. Kevin Moyaert (Belgium), Mr. Marc Percher (USA), Mr. Ravi Segu (Australia), Mr. Camille Habets (Netherlands), Mr. Helge Frandsen (United Kingdom), Mr. Ziggy Lubkowski (United Kingdom), Mr. Carlos E. Ospina (USA), Mr. Yoshiaki Higuchi (Japan), Mr. Atsushi Nozu (Japan)

本WGの目的はPIANCの既存の耐震設計ガイドライン(WG34, 2001年)の更新を行うことである。現在、WG 225の下に3つのサブグループを設置し、活動を行っている。Subgroup Aには第3章(設計思想)と第4章(要求性能)をお願いしており、主査はHelge Frandsen氏である。Subgroup Bには第5章(解析手法)をお願いしており、主査はMarc Percher氏である。Subgroup Cには第6章(構造細目)をお願いしており、主査はCarlos Ospina氏とJhon Paul Smith氏である。サブグループは極めて活発に活動を行っており、2023年9月の全体会合と2024年4月の間の7か月間だけでも10回のサブグループミーティングをオンラインで実施している。2024年4月2日～3日の全体会合では、まず筆者(野津)から、わが国の港湾における設計入力地震動の設定方法についてプレゼンを行った。わが国の港湾における設計入力地震動の設定方法は、断層モデルに基づく地震動シミュレーションを活用している点、地点特性の評価に地震観測を活用している点など、世界的に見ても最先端のものであり、能登半島地震への適用事例も含め興味を持って聞いていただいた。プレゼンに続いて、各サブグループの会合が行われた。議論の内容が多岐にわたったが、メンバーの大半がコンサルティングの実務者であることを反映し、PIANCのガイドラインと各国のローカルコードの記載内容をどのようにうまく組み合わせ設計を行うべきかといった点も一つの大きな論点となった。また、能登半島地震の経験も踏まえ、矢板式岸壁や栈橋の設計時に、あらかじめ大振幅の地震動を入力した解析を行っておき、天端残留水平変位と地中部材の応力状態の関係を把握しておくことが、地震後の利用可否判断に役立つといった議論も行われた。4月2日の晩には沿岸技術研究センターの主催による懇親会も開催された。今後は、9月末に向けて各章の執筆を行い、年内に各章の内容を調整するなど、レポートの整合性を高め最終化する予定である。多くのメンバーが、世界の港湾の地震対策に資するガイドラインの作成にやりがいを感じて取り組んでいるところであり、筆者は引き続き本WGの議長としてできる限りのサポートをしていきたいと考えている。



写真-1 OCDI 東京事務所における会合の様子



写真-2 沿岸技術研究センター主催による懇親会の様子